



しないと

太田 順一（おおた・じゅんいち）

1950年奈良県生まれ。早稲田大学政治経済学部中退。大阪写真専門学校（現・ビジュアルアーツ専門学校 大阪）卒業。第12回写真の会賞、日本写真協会賞第1回作家賞、第34回伊奈信男賞受賞。主な写真集は、『大阪ウチナーンチュ』（ブレンセンター）、『ハインツ病療養所 百年の居場所』（解放出版社）、『群集のまち』（ブレンセンター）、『父の日記』（ブレンセンター）など。著書に『ぼくは写真家になる!』（岩波書店）。

耕す人々 ③

写真・文 太田順一 Junichi Ota

大根、かぶらなどをずらり並べてみせる「道の駅かなん」駅長の阪上勝彦さん

「道の駅かなん」(大阪府南河内郡河内町)は「なにわの伝統野菜」が買える農産物の直売所として知られる。管理運営するのは「農事組合法人かなん」。こだわりを持った野菜づくりと直売を志向する農家が2004年、自主的に組織したもので、組合員は121人。生産者と消費者のコミュニケーションを大事にした販売で年々、集客力を高めていて、昨年の売り上げは3億4千万円超。優良な地産地消活動の団体として、2007年には農水省から大臣賞が贈られた。

農 家 も “ 営 業 ” を

阪上さんは農水省選定の「地産地消の仕事人」にも選ばれている



「なにわの伝統野菜」の勝間南瓜を収穫する「農事組合法人かなん」代表理事の久門明郎さん

「農事組合法人かなん」の専務理事であり「道の駅かなん」の駅長である阪上勝彦さん(69)の畑に行くと、あちこちの畝から大根を引っっこ抜いて、ずらり並べて見せてくれた。驚いた。大根の身は白いものと思っていたのに、鮮やかな紅色、薄紫、緑色、それに真っ黒なものまである……。

包丁で薄く切ったそれぞれの身を味見するよう勧められた。超辛からさっぱりしたものまでいろいろで、大根ひとつとってみても、その多様で豊かなありようを知らされる。あまりの辛さに顔をしかめると、にんまりして阪上さんはいった。

「消費者に農業のことを知ってもらうには、畑に来てもらうのが一番です。生産の現場を見て何か感じてもらえたら、野菜の買い方が変わって売り上げにもつながりますからね。私も農家も消費者に向き合って“営業”をしないと」

「道の駅かなん」では季節ごとのイベントが盛んだ。夏と冬、二度行われる「なにわの伝統野菜フェア」。河南町の特産品をアピールする6月の「リリーフェスタ」、8月の「いちじく展示品評会」などなど。毎週土日曜・祝日にひらかれる「ふれあい朝市」には農家である「農事組合法人かなん」の組合員が交替で売り場に立って、客とのコミュニケーションをはかりニーズをつかむ。

“営業”のおかげだろう、客のなかからはボランティアで農作業を手伝ってくれる「菜園クラブ」(70人)や「なにわ伝統野菜研究会」(50人)が生まれた。

「農業が元気になれば、雑草のぼうぼう生えた畑なんてなくなるし、地域社会も活性化するんですよ」



道の駅で人気商品の米粉パン。地産産の米を使って駅併設の加工所でつくる



「なにわの伝統野菜」フェア。田辺大根のふろふきが振る舞われる



ふれあい朝市。8時30分の開始前からいつも数十人が並び、ひっきりなしに客が来る



いちじく展示品評会。河南町の特産品であるいちじくも、農家の高齢化などで一時すたれていたが、展示品評会を開くことで見事、復活した



いちじくの果肉の状態や糖度などをきびしくチェック。この後、集まった客に販売される

